
君はアイドル

レオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君はアイドル

【Nコード】

N8327Y

【作者名】

レオ

【あらすじ】

星に誘われて、今、話題沸騰中のベルガク工房のコンサートに行くことになった癒菜。

コンサート会場はうるさくて、外に出た癒菜。

そこで、ある人に会って・・・?!

* 第1話* (前書き)

連載2作目です

更新速度、遅くなったらすいません(汗)

第1話、ご覧くださいます

登場人物

・東堂癒菜^{とうだうゆな}・・・高2、クールな性格、

超がつく美少女。女優セシルの娘。

・星空季唯^{せいくつきい}・・・高2、元気満タン。毎日ツインテールの

可愛い子。ベルガク工房とオシャレが大好き

・ベルガク工房のメンバー(計5人、全員高2)

折原零^{おりはられい}・・・リーダー、俺様、ボーカル担

白田皇^{しじょうこう}・・・副リーダー、草食、ボーカル担、ギター担

仲居翔^{なかいしょう}・・・メンバー、ムードメーカー、ドラム担

新井真^{あらいしん}・・・メンバー、子供っぽい、ギター

井坂雷^{いさからい}・・・メンバー、DS、キーボード担

* 第1話 *

「癒菜！ ツツツ」

読書しているあたしに走って近付いてきたのは
ツインテールの可愛い女の子。

名前は星空季唯^{せいくつきい}、高校2年生の元気満タンの子。

ちなみに、あたしは東堂癒菜^{とうどうゆな}、高校2年生のよく

「クールね」って言われるような性格らしい。

「星^{せい}、ドジして扱^{さく}けたりしたら、危ないよ」

「大丈夫！ ったあ！？、うわあっ！！！」

ドスツと鈍い音がして、次には「いたあっっ」って言う
星の声が聞こえた。

多分・・・いや。絶対にものすごく痛い、と思うんだけど

「予告したにも関わらず何やってんの・・・。」

「いやあ、ごめんごめん」とまあ、確実に次は気をつけようとか
言う

注意書きは星の頭に無いみたいだね・・・（苦笑）

「あ！でさでさっ！癒菜、明日用事とかない！？」

「別にないよ」

「あのね！明日、ベルガク工房のコンサートだあるの！でね！

そのコンサートに、わたし、あたっちゃったんだあ！」

「そうなんだ、よかったね？」

別に特に興味をもっていない私からすれば

どれだけ親友でも正直どうでもよかったりする。

「本当によかったあっ！あ、それでね！そのコンサートのチケット
2枚あるから

もう1枚癒菜にあげるからついてきてほしいのっ」

「は・・・？なんであたしまで・・・」

「いやあ・・・ほら、私すぐ迷子になってなにがなんだかさっぱり

になっちゃって・・・」

「はぁ・・・。ほんと、世話の焼ける子ね？ま、いいよ、ついてってあげる」

「やったあっつ！癒菜って本当いい人！最高！ダ이스キツ」
そういつてガバツと抱きついてきた

黒いツインテールがあたしの首に当たてくすぐったい

「星、くすぐったあい・・・。つか、くるしいっ」

首にがっしり手を絡ませてるもんだから、苦しくて仕方ない

「へへえんっ掛かったなあゝ！」

「わ、わあつかった！何をおのぞ・・・う・・・」

あたし、撃沈。

苦しすぎ・・・。

「あれ、癒菜がしんじやったー（笑）」

「んもー・・・馬鹿星・・・星へ帰れーっ」

こんな感じで、あたしは明日、ベルガク工房のコンサートに行く事になった。

***第2話* (前書き)**

第2話ご覧くださいませ

* 第2話 *

「癒菜、ごめえーん！まったあ〜？」

「大丈夫、あたしも来たところだよ。」

「そっかあ！じゃ、よかった！！さてと！いこっか！」

今日は星に誘われてベルガク工房のコンサートに行くんだけど正直、興味ないあたしは多分詰まんない顔だと思う・・・
ま・・・星は素でばけてるから気付いてないけどね

「ね！癒菜！今日の服どう思う？」

「ん？可愛いと思うよ？星っぽく、キュートだし」

「やっぱり？？よかったあ！わざわざ買った意味アリアリだあ〜」
ニコニコしながら首をブンブンとなぜかふりながら

嬉しそうにしゃべる星。

まあ・・・こう言うのがあるから、憎めない・・・んだよ

てか、隣にいるからそのツインテールがあって痛いんだけど・・・

「星、痛い」

「え？あははっ！ごめん〜！てかさ、癒菜の服

クールで大人でいいなあ〜っ」

あたしの服を見て、うきやきやと喜ぶ星。

これのどこをみていいなあと言ったのかさっぱりだ。

黒縁のダテめがねに制服のカッターシャツに縞模様のネクタイ

黒いスキニージーンズにハイヒール、髪の毛は下ろしたまま。

すぐくすぐくすぐく〜、普通なんだけど・・・

「しかもー！セクシィッッ」

星が目ハートにしながら、あたしの胸元をみた。

いつもの癖で、カッターシャツのボタンを4個目ぐらいまで留めていなかった。

まあ、下着が見えるわけでもないけどさ

「これ、セクシイなの？　と言うか、ついたけど・・・」

星がえ！？　といわんばかりに振り向くと

案の定、人にぶつかるわけ・・・でね

「ご、ごめんなさい！」

「んも、気をつけてね？」

優しそうなおねえさんだ。

ファッションは星と似てるかな？

「おねえさん！　その服、どこで買ったんですか！？」

「え・・・？　これ、手作りよ？」

「そうなんですかあ！？　すごいすごい！　その作り方おしえてくださあい！」

おいおい・・・ここで言うか・・・

そんなもの断られるに決まって・・・

「いいわよ！　あなた、座席どこかしら？」

「アリーナ席の　です」

「あらあ！　私とお隣ね！　ラッキーだわ、あなたみたいな子が横で
」！

さ！　いきましようか！

「はい！　癒菜、いこ！」

・・・。

何故こうなったのかあたしには不明すぎる・・・。

星の人見知りしなさすぎる性格には「あ」もいえない・・・

会場に入ると、ざわざわ、がやがや、うるさいったら・・・

あたしはうるさいところが結構苦手・・・。

席に着くと、星と比奈さん（さっきのおねえさん）は

すでに服のはなしとベルガク工房の話で大盛り上がりだ

「ごめん、星、あたし外のカフェにいるね？」

コンサート始まってもしないかもしれないけど、放っておいていい

から」

「うん！わかった！あ！それでね――」

なんて薄情な子だ・・・

まあ、いいんだけどねえ

外に出ると、もうほとんど人はいなくて

カフェなんて誰もいなかった。

「いらつしやいませ、ご注文お決まりですか？」

「コーヒーのブラックで」

「かしこまりました」

やっぱりベルガク工房って人気あるね

えっと・・・

メンバーはおりはられい しらかう折原零となかいしゅう白田皇とあらいしん いさからい仲居翔と

新井真と井坂雷だったっけな？

で・・・星がすきなのが仲居翔君だっけ。

そういえば皆、高2なんだよね

なんか、高2でアイドルって多分、てか絶対すごい

こんな事を考えて、多分15分ぐらいたった頃だった

「君、コンサート会場に入らないの？」

不意に後ろで声が聞こえて振り返った

「中はうるさくって、外に出てきてるんです」

帽子を深く被ったその子は、男性なのにきれいな肌で

長身で、顔はアンマリ見えないけど、世間で言うイケメンと言うも

のだと思う

「え、じゃあコンサート来てる意味って・・・？」

「ああ・・・、友だちが素ボケちゃんで、ドジだから

付き添いみたいなので来たんです。正直、あたしはベルガク工房に

興味無いんで・・・（苦笑）まあ、大体のことは知ってますけど・・・

・って

なんか、すいません。(汗)」

やば・・・長くしゃべりすぎた・・・。

「そういう事ね・・・？って・・・これ零に知られたら、君えらい目にあうね・・・」

「零ってベルガク工房のリーダーですか？」

「うん、そうだよ。あ・・・てか、君僕の事誰かわかって・・・ないよね？」

「ええ、まったく。まず顔、見えてませんし。」

「やっぱりね・・・ま、ファンとかじゃなさそうだから、バラしてもいいかな。」

そういうと、その男性は帽子をひょいと取り、机に置いた

「・・・白田皇・・・？」

そのキレイな肌の男性は明らかにベルガク工房の副リーダー、白田皇だった。

「驚かないね？」

「え・・・ええ、まあ、ちょっと動揺してますけど・・・

てか、なんでいるんですか？後5分とかではじまるんじゃない・・・？」

「なんか今、トラぶってるみたいだね・・・？僕、そういうの苦手です」

「そうなんですか・・・なんか、テレビとは違いますね、やっぱり」

「え？そのやっぱりの意味はなに・・・？」

「ほら、テレビじゃドがつくSですよ？ケド、今、SでもなければMでもない

極普通の男の子って感じで。まあ、テレビ見てたら大抵分かりますけどね？」

「ま・・・キャラ作ってるからね・・・？僕結構が弱いよ」

「男でもか弱いのは仕方ない事ですよ。と言うか、ソロソロいったほうがいいんじゃない？」

もう20分はたってるかと？」

あたしとしゃべってる間に実は時間は大いに過ぎていた

大丈夫なのか、あたしにはまったく不明で・・・

「そうだね、もう行こうかな。ああ、ついでに、君も一緒に来て？」

「は・・・？なんであたしまで？！」

さすがにこの発言にはびっくりだ。

いきなり来いとか・・・つか、ついでってなに？！

「マネージャーにぴったしかと」

「はああ？！」

「アイドルにはあはないでしょうよ？」

なんか、皇君テレビキャラに戻ったし！

「あたし、一般客ですよ？てか、そっちのほうの資格とか・・・」

「大丈夫、資格なんて僕たちでごまかすし。んじゃあ、行くぞ」

やばあ。こいつまじでSだろ！！

「ちよ、まつ・・・。もう・・・。」

あたしは諦めて、拒絶していた状態をやめて

渋々ついていく事した。

***第3話* (前書き)**

第3話ご覧くださいませ

* 第3話 *

カフェであって、なぜかマネージャーに任命されてつれてこられたところは、楽屋・・・らしい。

「ここが俺の楽屋。入って、ちょっとまってて？」

「ああ・・・はい」

楽屋全員別々なのか・・・。

恐るべし、ベルガク工房

部屋に入ると、何かすごい普通の部屋なわけで・・・
ベットあるし、シャワー室あるし、キッチンまでも・・・
ああ・・・そうか、ベルガク工房は一定の場所でしたかコンサートしないんだっけ？

あたしは入ってすぐのところにドアに寄りかかって
また、本を読み出した。

タッタッタッタッタ・・・！！
ばんっ！

ドアが勢いよく開いたかと思うと
皇君が息を切らして、あたしに言った

「ごめん！なんか、トラブル酷いらしくて！解決したらずく始めるから

後・・・3時間、ぐらい待っててもらえる？！」

「ああ・・・ハイ。」

「コレ、渡しとくから！コンサート見たかったらコレ、スタッフに見せて？」

誰か聞かれても、コレ見せて名前言っただね！それじゃ！」
ばしんっ！

今度は勢いよく閉まる。

・・・嵐だ・・・。

てか、別にこんな無くてもいけるんだけどね・・・

あたしは仕方なく、皇君の部屋にあるソファーに座って本を読み始めた。3時間か・・・5冊で足りるだろうか・・・（1冊30分）

10分ぐらいたったときだった。

外から「みんなーっ！待たせたねっ！ー！」と言う声が聞こえた。

えーっと・・・始まったのか？

で、多分・・・この声はリーダーの零か

さすが、声通るね

声もキレイだし

歌手って感じるねー。

1時間ぐらいたった頃だろうか。

廊下から声がした

『翔くどこへいったんだあつ』

この声、零君？

『なに？お前そんなに零が気になんの？』

『え、ああ、まあ・・・』

『零のくせして、きもちわりい』

『おま！てめえの部屋も見んぞ！』

あたしの予想だと、これはコンサートでよくある劇みたいなものかな。

声、大分通ってるみたいだし

会場と映像でつながってんだろな

あ・・・てか、今の状況だと

あと少しでココにくるわけだよね・・・？

つて、どうすんの！！！！

・・・ココは、あたしの才能で切る抜けてやるうじゃない・・・！

あたしは、本を閉じ、カバンに入れて、カバンからめがねを取り出しかけて

ネクタイをきつちり締める。

「よし。」

ドアを開けて、外にでる。

1mぐらい先に零君と皇君がいた。

皇君は目を見開いて、「なんで出てきてんの？！」みたいな顔をしている。

・・・あたしの才能嘗めないでいただきたいものだ

あたしはスタスタと歩いていき、カメラをよけて通りすぎた。

「おい！お前！誰だよ？！」

零君が声をかけた。

そりゃそうだ、知らないでしょうよ

「おはようございます、こちらのスタッフの東堂癒菜です。」
頭を下げてそこをさった。

これこそ、あたしの才能、「演劇」だ。

即興でやれといわれてもできるくらいにはある。

なぜかって？まあ・・・一応親は今人気の女優、芸名セシナ

本名東堂春千佳だからねえ・・・。

舞台裏まで行くと、スタッフさんがこっちをみてぎよっとする。

これまあ、当たり前だと思う。なにしろ、知らない人だし。

「ちょ、君！部外者は・・・！」

「セシルの娘です。」

「セシル・・・？つて、え！？あの人気女優の？！」

「ええ。」

「す、すいません！どうぞ、こちらに！」

「いえ、結構です。その近くで見せてもらいます」

ほらね、皇君に渡されたものなんて必要なし。

まあ・・・あんま親の名って使いたくないんだけどね。

近くでみるものの、思う事は同じでね・・・

「やつぱり・・・うるさい・・・」

はあ・・・楽屋に戻りたい・・・。

でも戻れる状況じゃないし・・・

皇君やらがココに戻ってきたら、そそくさと戻ってやる・・・

***第4話* (前書き)**

第4話ご覧くださいませ

* 第4話 *

10分ぐらいして、やっと皇君達は舞台裏のほうに戻ってきた。
もちろん、翔君を連れて。

カメラも回った状態だ

零君がこっちを見て、怪訝な顔をしたけど

あたしはニツコリ微笑んでペコリと頭を下げた。

翔君もこっちをみて目を見開いた。これもまあ、何でいるの？ 的な
奴ね……。

ま、今はスタッフ兼セシルの娘〃大物の子供〃大事な存在、だけどさ

皇君たちが舞台に戻って、あたしも楽屋に戻ろうとした。

が……そのとき、舞台から予想外に声が聞こえた

『翔も見つかった事だし！ 暇だから、美少女さがしでもない？

会場の皆さんの中で！！！！』

零君だ。

会場は『きゃあああ！！』と嵐のような声が聞こえた

まあ、ここまでは別に何と思わなかった

『俺かわいい子しってんでえっ！ 今、つれてくる！！』

そついうと舞台裏にピョンピョンと来て

あたしの前までくると『来て！』と、ニコニコしながら言われた。

……は……？

何であたしなんだ……？

意味わかんないけど！！？！！？？

「な、なんであた……私なんでしょう……？？」

「かわいいから！ ほら！ はやく！」

そついつてから耳元で「君、セシルさんの娘さん、だろ？」と囁いた。

・・・なに、それ。

まあいい、ここも演じるしか方法はない。

あたしはネクタイを緩め、ボタンも4つ目まではずすした

舞台に行くともあ、そこには「なんでおまえ!？」って言う零君と

「戻ってなかったのか?!」って言う皇君が・・・ね

まあ、翔君はそんな事もお構いなしで

「セクシーで可愛い子でしょ!」

と、零君と会場に笑いかける。

会場はシー・・・ンとしている。

や、やばい・・・ここはもう、あたしの出る幕じゃないわ・・・。

「あたし、時間がないの。だから、こちら辺でおさらばします

ごめんなさいね、それではシユウアゲイン」

そういつて、さり際に皇君に「ごめんなさい」といっておいた。

舞台裏に戻ると、あたしはスタッフの目にもくれず

カバンを取って、めがねをはずし、楽屋に戻った。

「はあ・・・。もう、ココにはいちゃいけないかな（笑）」

楽屋に戻って、最初に呟いた言葉だった。

なんとなくだけどさ、いたら、いろんな人を困らせてしまいそうなんだ

あたしはメモ帳に『いらない事をしてごめんなさい。』

マネージャーの件はお断りします。ありがとうございます。by

癒菜』

と、書いた。

「名前・・・知らないけど、まあ、いいかな」

あたしは、楽屋を出てさっきいたカフェとは反対側にあるカフェへ行った。

そして、また、本を読む。

自分でも思った、なんて波乱万丈な展開なんだ・・・と。
正直言つて、あたしはいつもこんな感じだ。
こんな感じで、最終的には人を困らせてしまう、最悪なんだ・・・

本を2冊、読み終えた頃だった。

リロリンリロリン

メールが来た。

「星じゃん」

メールを開くと、そこは、まあ星らしいっちゃそんな内容なわけだね・・・

件名：ごつめーん！

本文：ごつめーん！あのね！おねえさんと話盛り上がったちゃってさ！
コンサート終わったら、食事行こうって誘われちゃった！
だから、先に帰っててもいいですっ！ごめんね〜

季唯

・・・

結局そうなのね？

てか！来た意味ないじゃないか！！

・・・はあ・・・。無意味すぎ・・・さいっあく・・・。

「お客様、ご注文・・・は・・・」

不意に店員さんの声が聞こえてあたしはケータイを落としそうになる。

「わわっ！す、すみません（汗）えっと、ブラックコーヒーで！」

「かしこまりました、お客様、なにかお悩みで？」

「え・・・あ、いやあ・・・（笑）友だちの素ボケっぷりに絶句してて・・・」

「そうですかあ（笑）でも、かわいらしいお友達みたいですネ？」

「え？ええ、まあ・・・」

「そのストラップ、見たらなんとなくわかります」

店員さんがさしたのは、星とおそろいにした、クマが星^{ほし}を持つてるストラップだった

「店員さん、エスパーみたいですね？」

「そうですか？見たら、わかりますよ？コーヒー、お持ちいたします」

そういつて店員さんは奥に引いていった。

気さくな店員さんだなあ・・・と思いながら、また、本を読む。

「コーヒーお持ちいたしました。ごゆつくり」

店員さんはにこつと笑ってまた奥へ引いていった。

ケータイを見て、あたしはびっくりした。

なにしろ、もう3時間ちよいはたっていたからだ。

「はやいなあ・・・」

そう呟いたときだった。

「なにが早いのかなあ？女優セシルの娘の東堂癒菜さん？」
後ろから声がした。

今度はまったく動揺もなかった。

・・・また、皇君の声だった。

「・・・セシルの娘ですが、なにか？」

あたしなりに答える

「マネージャーの件断るとか、できると思ってるのかな？」

「ええ、まあ。あたしの意思ですし」

「コンサートに乱入したくせに？」

「あれは翔君が悪いんですよ。」

「ま・・・なんでもいいけど、断る権利とか一切ないから」

「・・・なんであたしなんですか」

「美人だから。」

「はあ？！それだけですかあ？！」

「んまあ・・・後は・・・秘密」

「はっ・・・とにかくお断り・・・」

「俺がお前を任命してやるよ」

あたしの言葉は、遠くから、だけど良く通る声で遮られた。

・・・零君だった

近くまで来ると、零君はニヤリと不適に笑い、あたしに告げた。

「お前、俺らの事興味ないんだってな？なら、お前が俺らの事が好き・・・いや

正確には俺の事が好きっていうまで、絶対話してやらねえ」

・・・。

意味がわからない。

興味ないけど、なぜあたしが零君のことを好きにならないといけな
いんだ？！

「ちょ、ちよつとまって？！意味わかんないって！」

「だーから、俺の事すきになるまで、まねやらせるってわけだよ。

こんな美人が俺に興味ないとか、まじ許せないし？」

「・・・色々おかしいし間違ってるけど訂正しないでいいんだね
？」

「ああ、別に間違ってるない」

「ちよつとまって、一つ訂正させて。あたし、美人じゃないし。」

「そこは一番訂正しないでいいところだし。まーとりあえず、こい」
無理矢理腕を捕まれて、また楽屋のほうに連れて行かれる。

「まって！あたしが行ってもいいこと起こらないし！」

「いいから、こい。否定権ないから」

零君ってむっちゃ俺様！？

もうつつ！

無理矢理すぎなんだし！！！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8327y/>

君はアイドル

2011年11月26日20時47分発行